

老人大学体験発表

ちよんじん

「北朝鮮清津港を利用した事業」

福寿学園園芸部 増田順夫



昭和39年に四国高知市の製紙原料を集荷・生産する林業会社に入社した。昭和39年は東京オリンピックが開催された年で、新幹線も東京と大阪間が開通、高度成長のはしりであり、景気は好調、紙の需要も旺盛でした。

過去は紙を製造する木材は松類のみだったが、技術革新によって広葉樹（雑木）も大量に使用されるようになり山林（奥地の天然林が主）の買い付け、伐採・搬出・用材仕分販売・木材チップ（パルプ原料）加工と多忙でした。

経済成長に伴って木材は海外から大量に輸入され、当時パルプ材もソ連の広葉樹（雑木）が主で、ソ連国との交渉窓口を一本化するため日本チップ貿易を設立、日本の窓口とな

り輸入、国内各製紙会社に配分されていた。

昭和45年10月姫路に一人で赴任して、兵庫県内の製材所・木材加工場の廃材チップを集荷、集荷したチップを網干木材港から機帆船で四国の製紙会社へ販売する業務に就いた。

姫路を中心とした瀬戸内地域にはマッチ工場・割り箸工場・木工所が数多く在り、マッチの原材料は白楊（ポプラの一種）・割り箸の原材料は白樺を使用。この原材料はソ連から用材として輸入した材と一部製紙会社からパルプ材の中から適材選木した材を使用していた。輸入された用材を見て、一括輸入した割安のパルプ材から抽出・選木したものを使用すれば売買双方にメリット有りと考え、未だ販売に着手していない製紙会社に働きかけて販売権を譲り受け自社の一事業部門とした。

経済の発展とともに昭和50年頃から為替相場が急速に円高へ移行し自社で輸入しても採算が合う様になり、

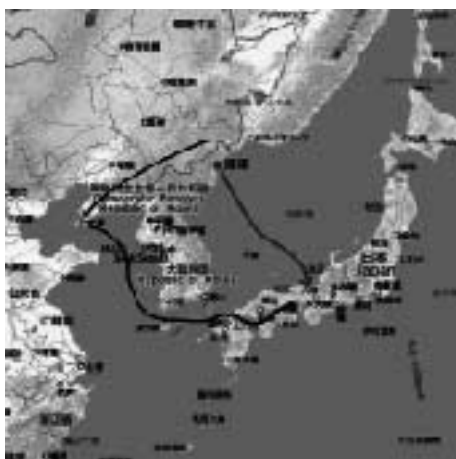
舞鶴港を拠点に年間5万m³前後を入荷。下材は自社でチップ加工して製紙会社に納入。用材販路も割り箸業界を主体に家具工場・合板工場へと拡大していった。

この様な状態が数年続いたが、国内で特殊木材を扱っている業界が商社を通じてソ連に働きかけ、簡単な仕分が始まり用材率が低下。この頃、舞鶴の倉庫会社から、中国・北朝鮮の山野菜を輸入している神戸市に在る在日朝鮮人商社が春から秋の間は山野菜を、冬季の仕事に中国産広葉樹を輸入したので受け入れ先を模索しているという事で紹介された。

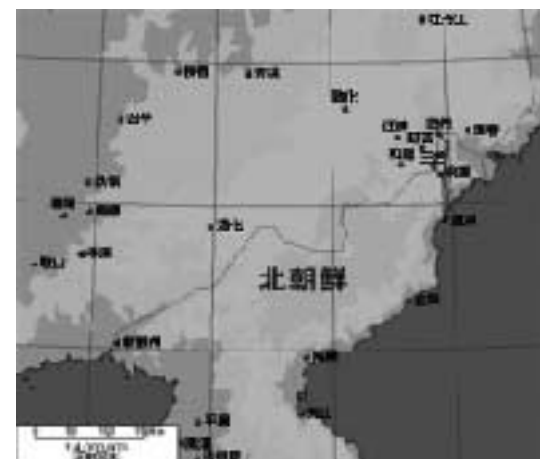
ソ連材の販路も拡大して家具工場・合板工場向け用材の不足と噛み合っって黒龍江省へ出向き検品、約400m³を大連港経由で神戸港に輸入することとした。神戸港は原木取り扱いに適していなく、諸費用全て割高で結局赤字となってしまった。自社の輸入価格は日本の港着で仕切っていたため、舞鶴港へ入れれば採算に見合う事で船便の模索。不定期便で北朝鮮清津港と舞鶴港と新潟港の航路を持つ船会社を知り、この船会社を使って数回輸入を試みた。

この間円高も進んでおり中国国内で製品化した品の輸出が増え、原材料

料（原木）入荷は不採算となり輸入を中止。中国国内（吉林省）での原木検品時に案内された貯木場には不適合材・視察先の加工場には加工廃材が無雑作に放置され腐食しかけた材が多々有った。この材をチップ化して輸出をしてみればと打診したが興味を示されずそのままの状態時が過ぎた。



積み上げられた木材（広葉樹：雑木）中国



★清津港について

それから3〜4年程経過した平成4年頃、為替相場が1ドル80円を割り込み木材チップは海外から為替差益分の値上げ要求があった。要求を達成する為、出荷量の抑制で製紙各社は原料手当てが一時的に不安定となった。このチャンスに先に見た中国材のチップ化、吉林省から北朝鮮清津港へ貨車とトラックで陸送、製紙会社社に持ち掛け承諾を得て、神戸の商社と共に実行する事となった。すでに他社が買い付けを開始したのか？中国国内で使用されているのか？判らなかつたがチップ加工機を設置している工場が数少ないが有った。各加工場にチップ機の設置を要求し、合わせて品質管理を説いて回り、船積みまでは中国側の責任、商社は船積み以降境港着までの費用を負担し製紙会社に売却した。

★中国国内について

初回、異物（ゴミ）の混入があり、対策としてペナルティーを課すことで解消させた。

初回、約束の期日までに数量の確保が出来なく数量確認の不備で、商社の社員が現地駐留し数量確認と品質管理を徹底した。

平成7年初めから中国からの出荷が始まり、それに伴い3月に港の設備を確認しに北朝鮮へ行くことになった。

通常日本人の入国は認められないがこの商社の力で朝鮮総連の内諾を得て中国の北朝鮮大使館に向きビザ発給を受け平壤入り、翌々日夜行列車で清津へ行き港の視察をした。積雪が有り一面銀世界で違和感があった事で見逃しがあつた。「積み込み機械は」と尋ねると容量計算をして大型クレーンに大きいバケットを付け実施するので問題はな」と言う回答で視察を終了。

初回、山口県の宇部港からスーパバイザーとして貨物船に乗り込み

清津港のパイロットポイントに着く、その時点で北朝鮮のビザ無しで入国した事が問題になり半日間留置きされる。この間商社職員は並々ならぬ努力をし、かつ袖の下（ウイスキー・タバコ）を提供、清津港滞在中の上陸は許可しない事でようやく接岸した。

初回、清津東港を利用、岸壁荷捌き場に野積みされたチップをクレーンで船積、視察時指摘したクレーンバケットが小さく作業が捗らない。上陸出来ないで荷捌き場の検品サンプル検収（水分測定）が出来ず中国側の提示した数量で引き取り。日本での検量と比べて約10%少ないと出荷数量が30%強少なく船運賃が割高で合計600万円程のマイナスとなる。（1995/10/10）

第二回、初回の多くの失敗を踏まえビザ無し入国出来る船員手帳を取得、問題なく入国出来業務も比較的にスムーズに捗った。積み込み設備の改善も要請したところ、清津西港に

以前中国政府が東北地区のメイズ（トオモロコシ）を海外へ出すため設置した設備が国内需要旺盛で遊休化しており、この設備を利用しようという事で翌年の平成8年4月に再度清津港へ設備視察・改善指示に向

いた。前回と同じく北朝鮮入国には手間取る。この設備は貨車・トラックの荷降し場の床が網目状で出来ており荷降しと同時に床下のコンベヤーに乗り、高さ30mの集積倉庫天井から落下させ大量保管出来る倉庫があり、床下も一定の幅で開閉出来て船積み時は荷降し時と同様コンベヤーで岸壁から突き出た部分へ運ばれるようになっていた。この設備は穀物を流す様になっており、木材チップを流すには開閉口が小さめ、口を大きくして利用する事とした。第二船（1996/8/04）・第三船（1996/12/10）・最終の第四船（1997/10/09）まで積み込み、検品、検量等事なきを得ていたが当初計画していた年間5隻が2年間で4隻。製紙会社より余り当てにならないことと計画を始めた時点から年月が過ぎ市場は状況が変化し、他の国から大量、安定的に原料となる木材チップが輸入されるこの事業は廃止となった。

この事業で1,000万円強の赤字を出して終了、悔しい思いをした事業であった。

思えば企業戦士として国交のない国との入国から交渉に渡って散々苦勞したが一般的にはできない数々の経験であった。